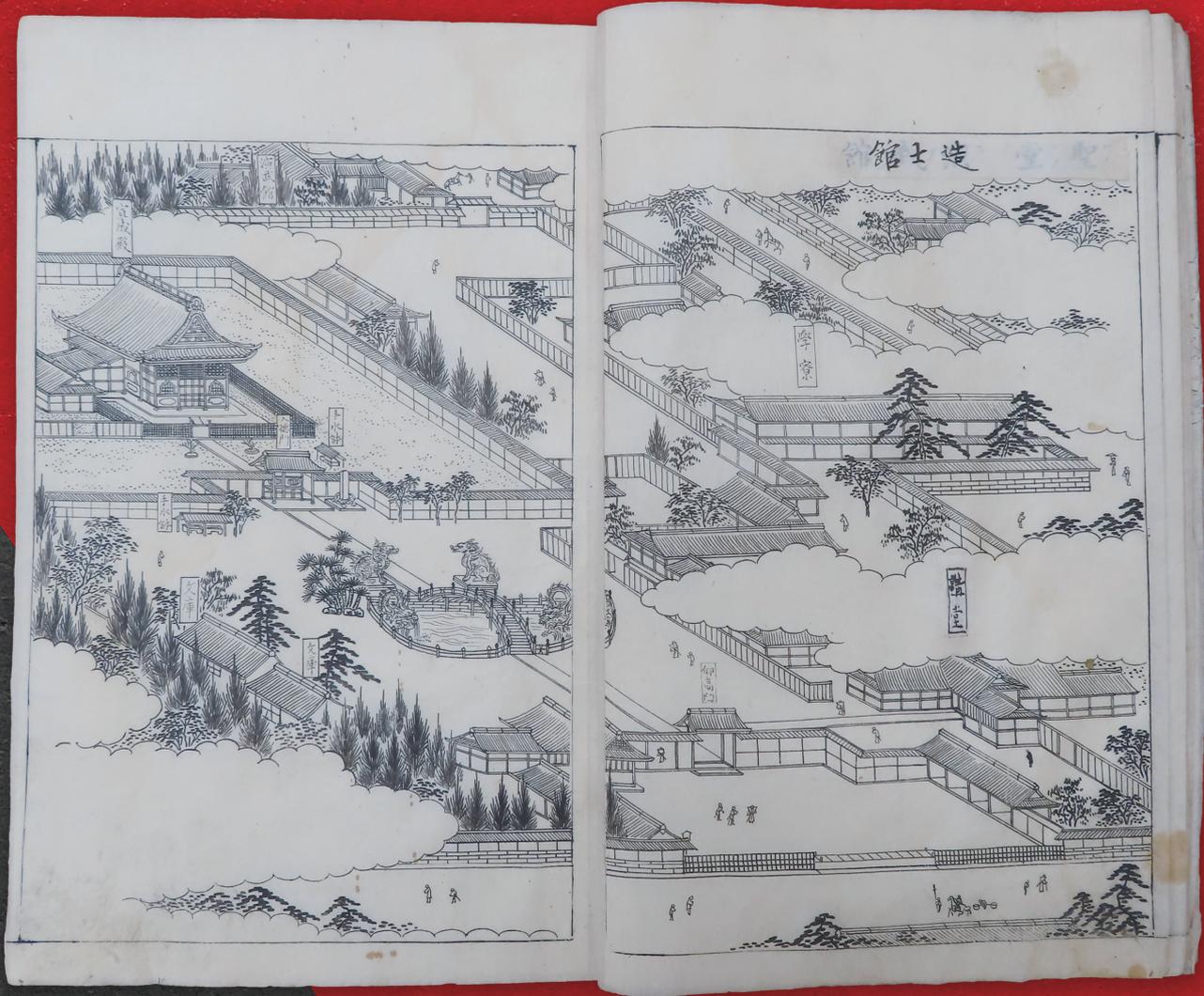


令和5年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開
藩校造士館創立250周年記念



藩校造士館と 第七高等学校造士館



『薩藩名勝志』巻2 (鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵)

鹿児島大学附属図書館

館長挨拶

鹿児島大学附属図書館では、「玉里文庫」に代表される歴史的典籍・文書を数多く所蔵しており、地域で大切に引き継がれてきた資料の保存と活用に取り組んでいるところです。多くの皆さんにその価値を知って頂くために毎年貴重書公開展を開催するとともに、資料の電子化を継続して行い、ホームページ内の「鹿児島大学デジタルコレクション」で一般公開しています。

今回の貴重書展では、法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターと協力し、鹿児島大学の前身とも言える第七高等学校造士館、そしてその礎となった薩摩藩の藩校造士館をテーマに展示を行うことにしました。本年は、造士館が薩摩藩第八代藩主島津重豪によって創設されてから250年目にあたります。江戸から明治へと大きく移り変わる時代の中で、薩摩の先達が学問をどのように位置付け、いかに真摯に取り組んできたのか、学問への強い熱意を感じて頂けると幸いです。

最後になりましたが、今回の企画展開催に当たりご協力を賜りました皆様に御礼申し上げますとともに、貴重な資料を引き継いでくださった全ての皆様に、心より敬意を表します。

令和5年12月

鹿児島大学附属図書館長 山本智子

目次

開催にあたって	1
第一部 藩校造士館	2
島津重豪の造士館創設	2
中国古代の学校と孔子廟	3
文化朋党事件と造士館	4
斉彬の改革	5
薩摩藩版	6
第二部 第七高等学校造士館	7
島津家と学校	7
コラム 七高造士館印	7
校舎と寮	8
修業年限・学科・カリキュラム	8
入試問題集	9
七高の雑誌	10
青春謳歌 学生生活	11
教師と卒業生	12
鹿児島大学の成り立ち	
－七高と近代鹿児島の高等教育機関－	14
藩校造士館・七高造士館関係年表	16
主要参考文献	17



「島津重豪公肖像画」
(鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵 玉里島津家資料)

開催にあたって

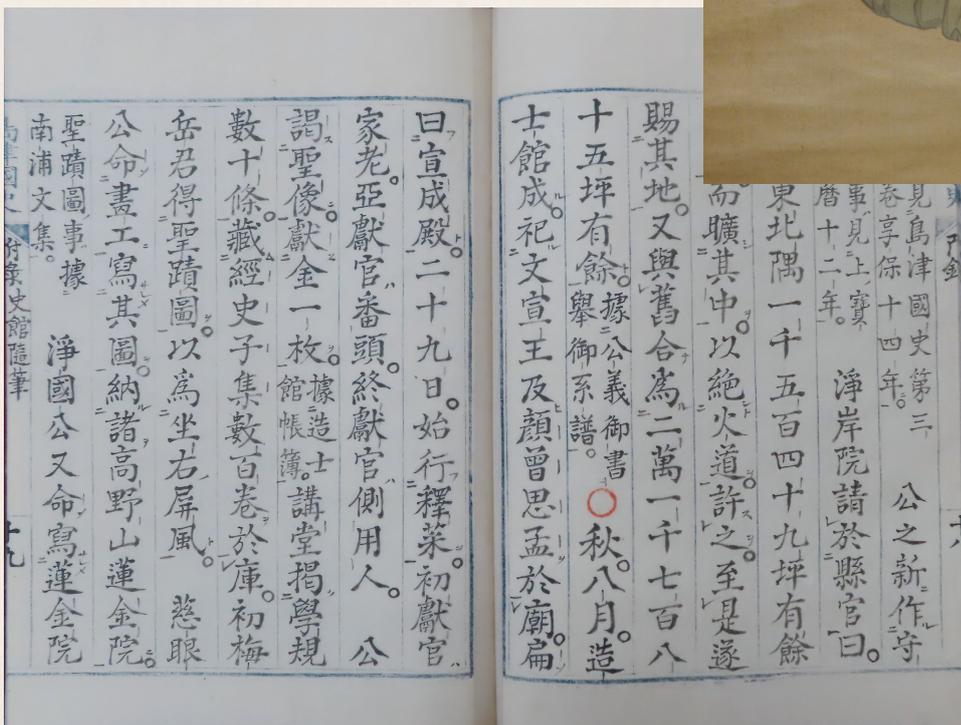
本年は島津重豪が鹿兒島城下に藩校を建設してから250年という節目の年に当たります。

鹿兒島大学はなぜ現在の場所に存在しているのか、どのような経緯で現在の形になったのか。先人たちはどのような教育を受けてきたのか。日々多忙な生活を送っている現代のわたしたちにとって、このようなことを立ち止まって考えることはあまりないでしょう。しかし、学校は偶然できるものではありません。何らかの意志あるいは必然性が働いて生まれてくるものです。また、学校は人々が集うことによって葛藤やドラマが生まれる重要な場所です。今回のコロナ感染症によって、大学の教育も大きな影響を受けました。遠隔での授業や会議によって形の上ではコミュニケーションが成立していますが、失われたものも多くあるように思います。学校とは何か、どうあるべきか、これまでと違う学校をどう作っていくのかを考えるべき時期にさしかかっているのかもしれない。

この機会に上記の問いへのヒントをさぐるべく、250年前に設立された造士館から現代に至る学校の歴史をたどってみたいと思います。

編者識

南九州は古来、大陸からの文化を摂取する窓口として機能してきた。儒教の一派である朱子学も早くより伝わり、中世後期から近世にかけて桂庵玄樹、南浦文之ら、いわゆる薩南学派が栄えた。禅宗寺院を中心とするもので、島津氏ら領主がこれに保護を加え、上級武士も門弟となったが、制度としては不安定で大名など個人の嗜好に影響されるところが大きかった。学問の興隆、士風の改革、有能な人材の育成を目指して安定的な学問所が開設されるには島津重豪（1745-1833）を待たなければならなかった。



右上：山本正誼肖像 「山本秋水写掛軸（小松甲川筆）」（鹿兒島県歴史・美術センター黎明館蔵）
下：「史館随筆」『島津国史附録』（鹿兒島大学附属図書館玉里文庫蔵）

第一部 藩校造士館

島津重豪の造士館創設

薩摩藩第8代藩主、島津重豪は、藩士の言語・風俗、ふるまいが他藩に比べて劣っていることを憂え、士風を改革するため、安永2年（1773）2月に儒学を中心とした教育を行う藩校の設立を命じた。場所は、現在の鹿児島中央公園の地で、孔子の霊をまつる廟（聖堂）と学舎が完成する。のち、天明6年（1786）に「造士館」と命名された。儒学のうち、薩摩藩では朱子学を教授した。加賀藩儒から幕府の儒官になった室鳩巢の流れを汲む山本正誼（伝蔵）が初代の教授（学長に相当）に抜擢された。

学規は次の七箇条からなっている。

- 一、講書は四書五経、小学、近思録等の書を用い、註解は程朱の説を主とし、みだりに異説をまじえ論ずべからず。読書は経伝より歴史・百家・農書に至るべし。尤、不正の書を読むべからず。
- 一、専ら礼儀ただしくして、学業を勤め、みだりに戯言、戯動すべからず。
- 一、疑ひは互いに問難すべし。専らその言をゆずり、我意を捨て、人に従うべし。
- 一、古道を論じ、古人を議して、当時のことを是非すべからず。
- 一、才学長ずるものあらば、ほめ進むべし。忌む悪む事あるべからず。
- 一、未々のものたりとも、学文に志厚き者は講義の席に加うべし。
- 一、入学の輩、字紙をおしみ、火燭を慎むべし。

（『鹿児島県史 第二巻』より。現代仮名遣いに改めるなど一部改変。）

重豪は、文武両道を兼ね備え礼儀をわきまえた士の育成を行うため、翌安永3年（1774）、「演武館」を設置して、槍、剣、弓馬、柔術などの武道を修業させた。

造士館の南隣には、「医学院」と医学の神、神農を祭った「神農堂」があった。造士館の南東には、天体観測を行う「明時館」（天文館）も設置され、薩摩の地にふさわしい暦（薩摩暦）が作成された。種まきや収穫の時を知るためにも暦は必須のものであった。天文館という地名は現在も繁華街の名前として親しまれている。

鹿児島城下を訪れた者は、西田橋の門、武家屋敷が並ぶ千石馬場をとおり、現在の照国通りに差し掛かると左手に孔子廟の朱塗の門と造士館の講堂・学寮の威容を眺めることになるのである。

造士館は、教授、助教、訓導師、都講、句読師頭取、句読師、句読師助、習字頭取、書役、書役助といった職によって構成されており、和学・漢学・筆道を教えた。經典の素読や講義が行われ、春秋の二度、家老以下役員が臨席して試験が実施された。（丹羽）



成尾常矩「鹿児島城屋形並周辺図」（部分）（鹿児島市立美術館蔵）
■が藩校造士館 □が明時館

中国古代の学校と孔子廟

中国古代の学校

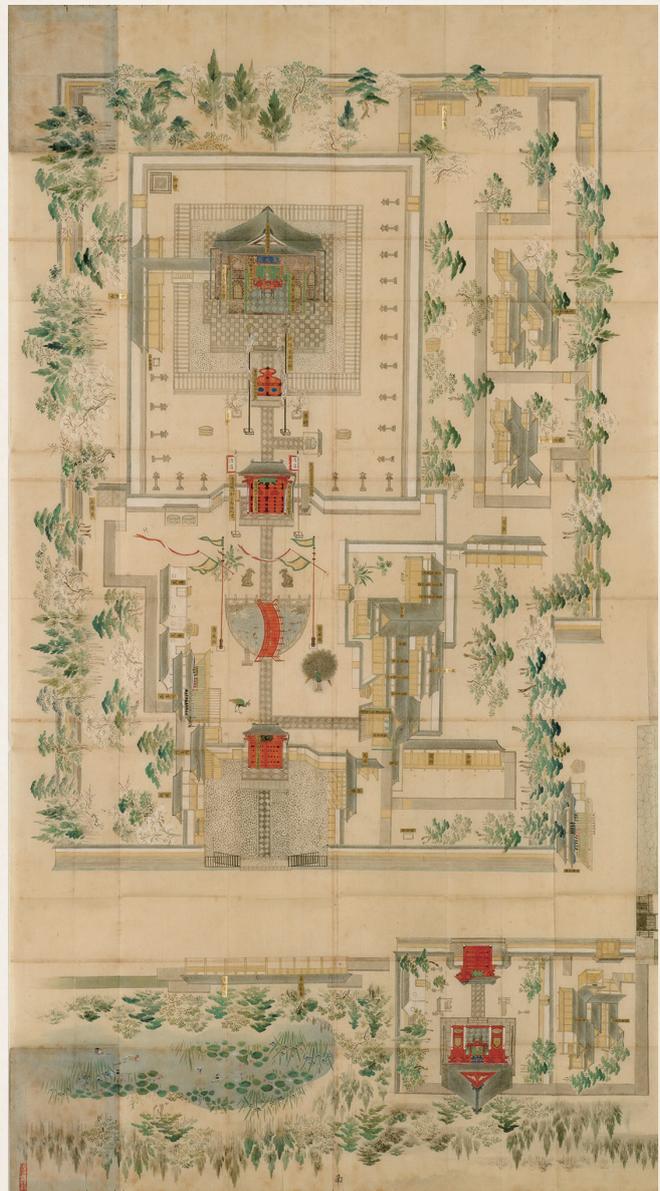
中国に於ける学校の歴史は古く、儒教の淵源に位置づけられる孔子（BC552-BC479）が古代と認識していた夏や商（殷）、周といった王朝に於いても、貴族及びその子弟が祭祀儀礼や射（弓術）・御（馬車の制御法）・書（文字の読み書き）・数（算術）といった教養を学ぶ機関として、「校」や「庠」、「序」といった官立の学校が設置されていた。その後、春秋時代末期に於ける孔子の活動から四百年強を経て、前漢末から後漢にかけて国家による儒教の保護、国教化が行われると、最後の封建王朝である清朝の終焉まで、中央と地方、或いは官学と私学、それらの区別を問わず、基本的には儒教が学問の中心であり続けた。

孔子廟の類型

孔子廟は、その原型を魯国の哀公が孔子の没後に山東省曲阜に造営した靈廟に発し、中国の歴史上、二千強の廟堂が建設されたようである。その類型には、孔家の「家廟」、皇帝や官僚が公的な祭礼を執り行う「国廟」、祭祀を含む儒学教育を行う機関としての「学廟」、以上の三つがある。このうち、それぞれ二箇所「家廟」・「国廟」を除く全てが「学廟」である。明代・清代には、各地の官立学校と孔子廟は互いに一体不可分のものとして設置された。林鳳谷（林家第五代、大学頭。1721-1774）の「薩州鹿兒島学記」に拠れば、造士館の孔子廟は、江戸の聖堂を直接のモデルとする。その湯島聖堂は、明代の孔子廟に範をとるようであり、造士館孔子廟もまた明代以降の学廟の系譜に連なるものと言えるだろう。

造士館内の孔子廟

造士館図（表紙及び右の図版を参照）を見ると、左上に「宣成殿」と表示された建物があり、そこに至る参道には、「仰高門」、「入徳門」と表示された門を確認できる。「宣成」は、孔子の尊号に由来しており、宣成殿が孔子廟であることがわかる。「仰高」は、『論語』子罕篇に孔子の説く道が高遠であることを言う一節に由来し、「入徳」は、南宋の朱熹（1130-1200）が定めた四書のひとつ『大学章句』に、本書が孔子の道を学ぶ入り口であることを説く一節に由来する。造士館内西側の相当の面積が、これら孔子廟に連なる建築物で占められており、学校と一体化した学廟としての様子を見ることができる。（大淵）



「薩州府下聖堂之図」（名古屋市蓬左文庫蔵）

正門（仰高門）内には孔雀が放し飼いされている。門内には石像や旗など中国色に溢れている。

文化朋党事件と造士館

天明7年（1787）、島津斉宣しまづなりのおぶが9代藩主を継いだ。前代重豪の開化政策により藩の財政は破綻へと向かっていた。斉宣は文化4年（1807）、近思録派きんしりくを起用し、徹底的な緊縮政策を実施し、重豪の政策をことごとく破却した。そのため、重豪は翌年に榊山久言かばやまひさこと・秩父季保ちちぶすえやすらに切腹、遠鳥、剃髪を命じ、さらに斉宣を隠居させて孫の斉興なりおきに襲封させた。この一件を文化朋党事件、あるいは近思録崩れ、秩父崩れと呼ぶ。その名は、処分された秩父季保らが『近思録』（朱子学の教本で、儒教の実践に重きを置く）の読書仲間であったことに由来する。

学派の対立

薩摩藩では、享保期（1716-36）以降、室鳩巢学むろきゅうそうをはじめとして徂徠学そらいがくなど、学問の主流であった儒学きつなんがくはの薩南学派とは異なる学派がもたらされ、学党が形成されるようになった。川上親埤かわかみちかますは、詩文中心であった鳩巢学派に対し、四書・小学を中心とした実践的な学問を主張して対立した。それは単に学問上の対立を超えて、藩政のあり方をめぐる政治的な対立へと発展し、寛延3年（1750）に川上一派を遠鳥に処することで決着をみる。

重豪は、安永年間（1772-1781）に造士館初代教授となった山本正誼（1734-1808）を重用した。山本は室鳩巢学派の一派で、儒教の実践よりも詩文の芸に重点を置き、朱子学こぶんじがくと古文辞学の折衷のような学派を形成していた。造士館の教授職をめぐって、徂徠学の服部南郭はっとりなんかくの門人で薩摩に徂徠学をもたらした市来政公をはじめその門人の川上嘉膳かわかみよしあきらと山本らの鳩巢学派との間に対立が生じた。さらに川上らは藩政批判を展開したため、重豪に弾圧される「古学崩れ」という事件（天明5・6年〈1785・86〉）にまで発展した。山本が造士館教授職を辞任すると、斉宣の侍読じじどくである赤崎貞幹あかきていかん（1739-1802）が教授となる。しかし、その赤崎が死去すると、再び山本が教授職に就いたため、儒教の実践に重きを置いていた近思録派は、この人事に不満を抱くことになる。

造士館において、こうした学派が政治性を帯び、対抗勢力として藩政を混乱させる危険性を孕んでいたため、藩内の学問を組織的に統括する必要があったといえよう。

斉宣の藩主就任と近思録派

斉宣は天明7年（1787）に藩主となったものの、その後も斉宣の後見（「介助」）というかたちで重豪が藩政に関わり続けた。斉宣は、文化2年（1805）に為政者が身を慎み、民を慈しむべきことを鶴と亀の問答の形で述べた「亀鶴問答かめつるもんどう」を家臣に配付し、財政改革に取り組み意思を示した。斉宣は、文化4年に榊山久言と、その榊山が推挙した『近思録』の読書仲間の秩父季保を家老に抜擢した。近思録派の政策は、儒教的な理想主義のもとに質朴な薩摩の古風を復興し、儉約主義で財政復興を試みようとするものであり、これまで重豪が力を入れてきた開化政策に対する反動改革であった。そのため、重豪の怒りを買って、榊山や秩父らが関係した政務書類の全焼却を命じ、近思録派の改革は存在すら抹殺されることになったのである。

文化5年（1808）、榊山は蟄居閉門ちつきよへいもん（のちに切腹）、秩父は喜界島へ遠鳥（のちに切腹）など、切腹13名、遠鳥25名、剃髪42名、逼塞23名、謹慎など12名にのぼった。

文化6年（1809）、斉宣は近思録派を取り立てた責任を問われ、隠居に追い込まれ、家督を斉興に譲らされたのである。（佐藤）

斉彬の改革

西洋列強と対抗していくために、近代化事業を急いで推進する必要があると考えていた薩摩藩第11代藩主島津斉彬は、造士館の学風の弛緩を矯正するため、改革を推進する。

斉彬は詩文を弄ぶ朱子学派を批判し、真に学問の修行に熱心な者を見出し、実践的な学問を重視して、日本という視野から改革を推進しようとしたのであった。

斉彬は、安政4年（1857）10月、家老の連名で、造士館と演武館について藩士に向けて通達を出させたが、十条のうちの三条の内容を以下に紹介する。

- 学問の目標は、「修身齐家治国平天下」の道理を究めることにあるとし、それぞれの任務に堪えるように心がけることが大切である。漢詩を作ることは儒学者の学問上必要なことであるが、人材育成と正しい気風の涵養が第一である。
- 日本の学問（古典、律令格式、日本書紀を初めとする六国史）を起こし、国の役に立つように工夫すること。
- 博学多才であっても今日の政務に役立たなくては意味がない。和漢の典籍を涉獵して今日の実行に応ずる良臣の育成（「造士」）を行うこと。

また、斉彬は上級家臣に向けて次のようなことを推奨しているのが注目される。

国中而已の学友には『井中之蛙』にひとしく候。……文武の修行を専要として内疎からぬ様心掛たく存じ候。隣境肥後・肥前等は一門の支族の家嫡等家来両三人召し連れ、平士巡歴の姿にて随意に文武修行の由に候。これらは軽々しき様に候えども国家を大事に考へ候へば至極の良法に候。大身の面々は父母の姑息を離れ、家中諸士の阿諛をまぬかれ、卑賤の辛苦を識り得て各国の事情に達し候良法と存じ候間、以来志有之人々は家嫡にても無役の内他国修行、両三年願出候様申付たき事と存じ候。『造士館演武館志』

ともすると父母や家臣の側でぬくぬくとした生活を送り「井の中の蛙」のように視野が狭くなりがちな上級家臣に対して、文武の修行を目的に積極的に藩の外に出て、下々の者の苦勞を知り、他国の事情に通じ見聞を広めることを勧めている。具体的な例として、熊本藩や佐賀藩で行っている、支族の若者を連れ、並の武士に姿をやつして各地を巡歴、修行するのが国家（藩）のためによいという。

斉彬は、四書・五経など儒教の経典を「薩摩府学蔵版」（藩版）として刊行するとともに、安政4年6月、当初納戸奉行の管轄にあった藩版の担当を改め、又木元右衛門・青木静左衛門を書籍支配人に任命して藩版の普及と有用の書物の流通を図らせた。

藩校は儒教倫理に基づいた士風の涵養、学問の統制といった機能を果たしていたが、学問修行に行く場合、造士館に届け吟味を受ける必要があった。斉彬は造士館に通っていない者や朱子学以外を学ぶ者が不利になることがないように造士館教授に通達を出している（安政4年9月）。（丹羽）



「島津斉彬公肖像画」（鶴嶺神社蔵）

薩摩藩版

重豪の出版

重豪は、西洋の文物・学問のみならず、中国の文化、日本古来の文化にも関心をもっており、出版物にもそれがよく表れている。

『円球万国地海全図』（世界地図）

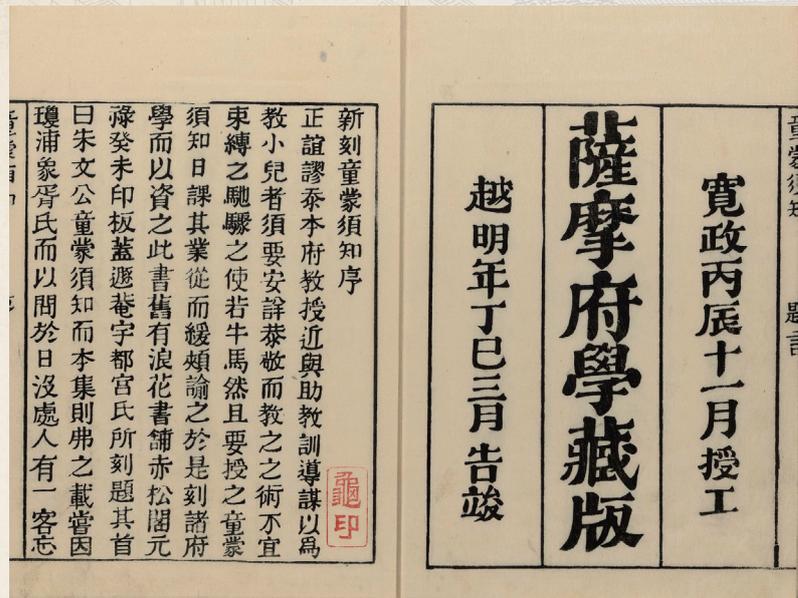
『助字雅訓』（漢文）

『童蒙須知』（漢文）

『成形図説』（農学、博物学）

『南山俗語考』（中国語）

『鳥名便覧』（博物学）



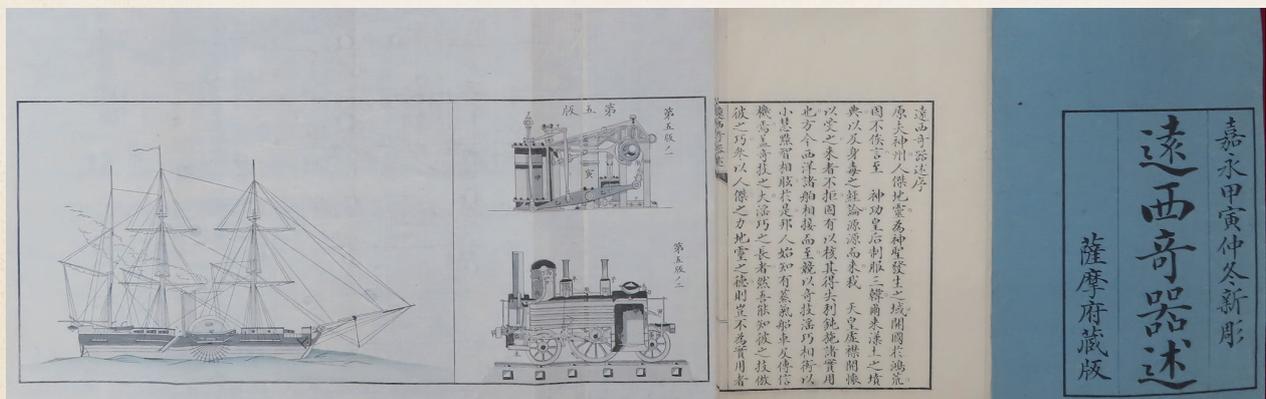
『童蒙須知』〈寛政9年刊〉（鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵）

このうち最大の著作は、『成形図

説』（100巻を目指して編集が進められたが、刊行は30巻30冊）で、国家の基礎となる農業に関わる古今万般の事象について解説を加えた本書は、明時館で作成させた薩摩暦とともに、統治者としての気概が表れた出版物といえる。『助字雅訓』『童蒙須知』も藩士教育に資することを目的としたものである。一方、石塚崔高に編集させた『円球万国地海全図』は蘭学への関心を、中国語語彙辞典ともいべき『南山俗語考』（「南山」とは重豪の号）や鳥の名称とその属性などを記した『鳥名便覧』は重豪の趣味を反映している。

斉彬の出版

斉彬の出版の特徴は、対象のジャンルが儒教の経典と西洋の科学技術や医学に関する書籍が中心であり、実学的な側面が強いという特徴がある。斉彬は藩主になる以前から出版にかかわり、『四書集註』『五経集註』『中庸古文孝経』などの儒教の経典を薩摩藩版として刊行、その一方で『遠西奇器述』『航海金針』『氣海観瀾広義』『施治攬要』『散花小言』なども刊行し、藩内に西洋科学の技術を逸早く導入することを目指した。斉彬は、活版印刷にも注目し、三代目木村嘉平（1823-1886）に金属活字の鑄造を命じたことも有名である。（丹羽）



『遠西奇器述』〈嘉永7年刊〉（鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵）

第二部 第七高等学校造士館

島津家と学校

明治維新後、鹿児島藩では藩校造士館とおなじ場所に本学校、地方に郷校が設置され、漢学・国学・洋学と、英語・フランス語を教授したが、明治4年（1871）に廃校となる。その一方で、明治6年（1873）に西郷隆盛が鹿児島に戻ると、多くの若者が西郷のもとに集まった。青年を教育する施設として私学校が鹿児島を中心に各地に設置された。

明治10年（1877）明治政府への不満が爆発して西南戦争が起きると、鹿児島の若者が多く従軍し、建物や人命が失われた。明治14年（1881）、島津家と旧薩摩藩士が資金を提供して磯（鹿児島市吉野町）に鹿児島学校が設立され、校舎として旧鹿児島紡績所技師館（現在の異人館）が利用された。翌年、この学校は鹿児島城本丸跡に移転する。

明治17年（1884）、島津家が鹿児島学校の建物と資金を提供し、県立鹿児島中学造士館が設立され、その後、鹿児島高等中学造士館となるが、県立尋常中学校ができると、中等教育の需要はまだ高くなかったため、廃校に至る。全国に高等学校を設置する政府の方針のもと、明治34年（1901）再び島津忠重は校舎をはじめ16万円余の寄付を行い、旧鹿児島城跡に再び官立の第七高等学校造士館が設立されることになった（10月25日開校式）。鹿児島高等中学造士館に配布された明治天皇直筆の「教育勅語」が奉持されたという（木崎弘美「第七高等学校「造士館」号の研究」）。（丹羽）



第七高等学校造士館全景（『第七高等学校造士館創立二十五周年記念誌』より）

コラム 七高造士館印

本印は七高造士館の創建に合わせて製作されたものと推定され、鹿児島大学文理学部を経て、法文学部に伝来する。高さ17cm、縦5.9cm、横5.8cm。印文は「第七高等學校造士館印」（篆刻）。鈕は母子の獅子。右側面に「甲申十一月篆于東京／客寓 長崎 石癡成瀬米」、正面に「明治三十四年七月下浣／雲巢椰川玄壽刀」とある。「甲申」は明治27年（1894）。この年、長崎の著名な篆刻家、成瀬石癡が東京に滞在していた際に製作した篆書を、東京の篆刻家椰川雲巢が明治34年（1901）7月下旬に彫刻したものと推定される。（丹羽）



第七高等学校造士館印（鹿児島大学法文学部蔵）



校舎と寮

校舎は、本館や講堂、各種教室のほか、本を読むための閲覧室や柔道及撃剣場などによって構成されていた。「第七高等学校造士館全図」を見てみよう。本門を抜けると正面に本館、向かって左側に普通教室や生徒控所があり、右側に壱号寄宿舍が置かれていたことが分かる。

本館は木造2階建てで、1階は事務室・応接室・職員食堂、2階は校長室・教官室・会議室がそれぞれ備わっていた。昭和11年（1936）に礎に移転され、翌12年（1937）5月には鉄筋2階建ての新本館が建設されている。

本館の奥には2階建ての閲覧室と、3階建ての書庫が置かれていた。教室は2階建ての「普通教室」のほか、「物理学教室」・「博物学教室」・「化学教室」・「図画教室」があった。教室それぞれに講義室があり、そのほかの設備として物理学教室には機械室と天秤室、博物学教室には博物実験室と標本室、化学教室には実験室と器械薬品室、天秤室があった。少し離れた場所にあった図画教室では講義室に加え、製図室と準備室及器械室があった。なおこの図にはないが、昭和2年（1927）8月には正面お濠端上に天文観測室が設置された。

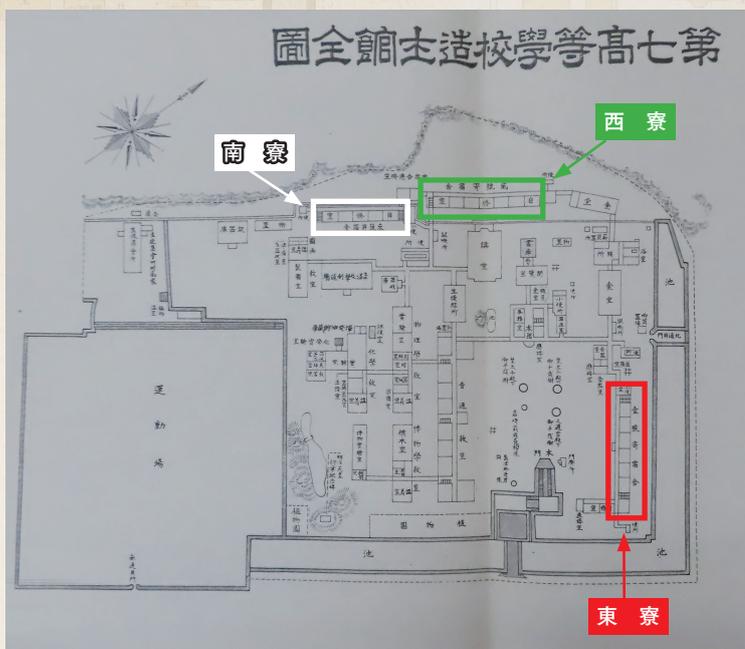
七高造士館には3つの寮が存在した。明治34年（1901）9月に壱号寄宿舍（東寮）が開舎し、以後明治45年（1912）2月に弍号寄宿舍（西寮）が、大正9年（1920）1月に参号寄宿舍（南寮）が建設された。寮は2階建てで、東寮には医員室や応接室が備わっていた。3つの寮は連結しており、東寮と西寮の間には賄所と浴室、そして2つの食堂があった。昭和2年2月22日、火災により西寮および南寮2棟が焼失するも、翌3年（1928）6月に3棟とも新築された。

修業年限・学科・カリキュラム

大正7年（1918）12月制定の「高等学校令」に基づき、七高造士館の修業年限は3年、生徒数は480人以内とされた（1学級の生徒数は40人以内）。学費は、当初1学年25円だったが、明治38年（1905）に30円に改正となり、以降35円（明治44年）→40円（大正9年）→50円（大正11年）と改められた。

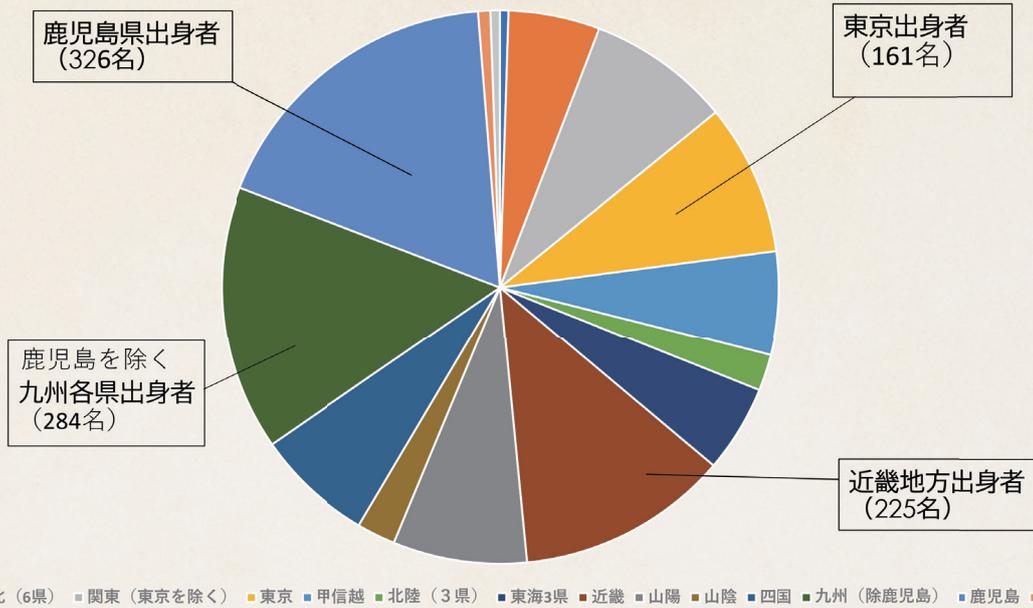
学科は第1～3部で構成されていた。第1部は法科・文科大学志望者に、第2部は工科・理科・理工科・農科大学志望者に、第3部は医科大学志望者に課せられ、それぞれ異なるカリキュラムが設定された。例えば第1部は倫理、国語及漢文、外国語、歴史、論理及心理、法学通論、体操とし、これに加えて文科志望者には経済通論を、文科哲学科志望者には論理及心理に変えて数学と物理が課されていた。外国語は英・独語を課し、志望によって時数を変更した。

こうしたカリキュラムは、戦時色の強まりに伴って変化する。昭和17年（1942）4月には戦時技術者養成のために理科が2学級増募となった一方で、修業年限は短縮、同年9月に第3学年が繰上げ卒業となった。翌18年（1943）には修業年限が2年に短縮され、19年（1944）4月には理科を3学級増募して計8学級とする一方で、文科は1学級に削減された。（伴野）



「第七高等学校造士館全圖」（部分）（鹿児島大学附属図書館蔵）
（大正14年9月印刷）

七高造士館の出身地域別卒業生数
(明治37年~大正4年)



旧制高等学校は大学の予科として大学進学を前提とした教育機関であり、現代と比べて大学進学者が少なかった当時、高校生は知的エリートとして地域の人びとから一目置かれる存在だった。富裕層の子弟が多く、三年間、勉強に、スポーツ・芸術にと、彼らは青春を謳歌した。

『第七高等学校造士館一覧』(大正5年)には明治37年(1904)から大正4年(1915)までの12年間の卒業生の出身県のデータが掲載されている。これによって、過去12年間の卒業生全1834名の出身地(県)を見てみると、一位は地元の鹿児島県で326名、二位は東京府(161名)、三位は福岡県(94名)、四位は山口県(60名)。少ないのは秋田県(7名)、北海道(9名)、青森(10名)、群馬県・岩手県(各11名)、石川県・沖縄県(各13名)。上の円グラフからわかるように、全国から学生が集まってきていることがわかる。なお、他府県出身者の中には鹿児島県出身者の子弟もあったと思われる、たとえば大正2年理科2部を卒業した加納久憲は、「勸農知事」として知られる鹿児島県知事、加納久宜かのうひさよしの三男(本籍千葉県)で、父が知事を辞めて鹿児島を去った後、父が創立に関わった七高造士館で学んでいる。

入試問題集

高等学校に入るには当然のことながら入学試験に合格することが必要である。

全国の高等学校は明治35年(1902)以来同じ日程で入試が行われた。七高造士館の文科では、外国語・数学・国史・国語・作文が課され、理科では外国語・数学・国史・理科物象・作文が課されているが、太平洋戦争中には外国語は外されている。現在と同じく、受験勉強には参考書と問題集が欠かせないが、図書館に保存される書籍ではなかったため、現在では希少な本となっている。(丹羽)



『校別科別最近八年 入試問題解説法 No.18』
(有朋堂書店、1939年)の表紙と入試問題

第七高等学校造士館

(1) $\sqrt{x+y} - \sqrt{x-y} = 2, x^2 - y^2 = 9$ を解け。



七高の雑誌

旧制第七高等学校造士館では、学友会・部活動・寮・同窓会など多様な組織が主体となって数多くの雑誌が刊行されてきた。天皇の行幸や節目の年を祝う記念誌もある。

学友会関連雑誌

七高が設置されて間もない明治35年（1902）1月に教職員と学生からなる学友会が組織され、雑誌『学友会雑誌』が同37年（1904）4月に創刊される。その内容は「論説」「雑録」「文苑」「雑報」「附録」で、独語教授片山正雄（孤村）による「ゲーテが修養の一面」などの西洋哲学論や漢文教授山田準（濟齋）による漢詩文、他にも学生による自由詩など会の幅広い文筆活動がみられる。桜島が噴火し七高も損害を被った大正3年（1914）には第29号を数えたが、同号は『桜島噴火記念号』と題され、「桜島噴火研究」「桜嶽噴火年表」など噴火が研究・考察されている。

また、学友会内には当初、雑誌部・弁論部・端艇部・柔道部・撃剣部・野球部・庭球部・弓術部の八部が編成され、大正期から昭和期にかけて次第に拡大し、『学友会雑誌』の流れを継承した『啓明』（文芸部）をはじめとして各部が、『銀泥』（柔道部）、『剣友会誌』（剣道部）、『弓夕』（弓道部）、『南溟』（旅行部）などを刊行している。『啓明』94・95号には黒田三郎が詩・俳句を寄稿している。

昭和3年（1928）2月11日の紀元節には『七高学友会報』が発刊され、同6年（1931）の第15号で創立30周年記念特集が行われている。



『啓明』復刊第2号
（個人蔵）



『団報』
（鹿児島大学附属
図書館蔵）

寮誌

七校には、後に東寮と呼ばれる創立時の寄宿舎、明治45年（1912）2月に増築竣工した西寮、大正9年（1920）に設置された南寮があり、それぞれが、論説や創作を編んだ雑誌を発行している。東寮には『玉觥』、西寮には『緑塔』、南寮には『白光』がある。『緑塔』には、当時文科乙類に在籍し後に鹿児島大学文理学部・教養部で教鞭を執る、渡邊外喜三郎が作品を寄せている。



『玉觥』
（鹿児島大学附属
図書館蔵）



『緑塔』
（個人蔵）



『白光』
（鹿児島大学附属
図書館蔵）

記念誌

大正15年（1926）、七高創立25周年を記念した『記念誌』が発行される。同校の沿革と概要、寄宿寮の沿革、各部活動の沿革史、教員・卒業生らによる感想録が収められている。また昭和10年（1935）には11月6日に昭和天皇が陸軍特別大演習・海軍特別演習のため九州を訪れたが、その際の七高造士館訪問を記念した『行幸記念誌』が作成され、日程・奉迎準備・予行演習などについて詳細に記録されている。

昭和15年（1940）に学友会は時局に応じて解散し「報国団」が結成される。『七高学友会報』を改めた『七高報国団団報』も創刊され、翌16年11月の第4号は創立40周年を記念した特別号となっている（写真、上段右）。

同窓会誌

同じく昭和15年（1940）12月には同窓会新会則により『同窓会報』が創刊される。同号には、同窓会員の思い出・近況報告・名簿だけでなく、戦火の犠牲となった講師・卒業生の履歴と写真を載せた「英霊十二柱」の記事がある。同誌は戦火の中、同17年（1942）の第3号まで続いた。（鈴木）

青春謳歌 学生生活



動植物実験室（左）と食堂 『開校第十周年記念帖』（明治44年10月）による。

授 業

授業の始まりはラッパによって告げられる。写真は生物の授業風景であろうか。授業はなかなか厳しかったようで、多くの学生が語学や数学で苦労したようである。昼休みには食堂で昼食を食べた。また、大正末期からは軍事教練も授業科目に加えられ、グラウンドや伊敷の練兵場で訓練が行われた。

課外活動

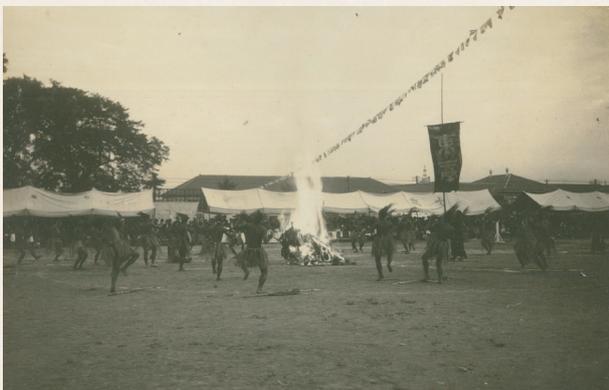
課外活動では、各種の文芸誌に見られる詩文や囲碁といった文化活動のほか、野球やホッケーといった各種スポーツが挙げられる。年に一度の大運動会は余興を伴って盛大に開催された。熊本の五高を相手とする「対五高戦」も行われ、特に野球は、薩摩（鹿児島）VS 肥後（熊本）の構図で一般市民をも巻き込んで大々的に行われた。

年に一度開催される記念祭も、学生生活における一大イベントであった。学生たちは思い思いに仮装して行列をつくり、夜には寮庭でファイヤーストームを行うなどした。

ストームに関しては記念祭のみならず、三寮合同での「新入寮生歓迎ストーム」や「天文館ストーム」など度々催され、学生たちはふんどし姿になりながら大いに騒いだ。

余 暇

つかの間の余暇を使って、学生たちは仲間とともに校外に出かけた。ある者は山形屋「ベルグ」でコーヒーを飲み、ある者は日活の劇場で映画を観た。冬になれば、夜中正門石橋の袂に夜泣き蕎麦を連れ立って食べに行くこともあった。



昭和10年頃の七高卒業生のアルバム（個人蔵）より

大半の七高生は大学への進学を目指し、友情を厚くして学生生活を謳歌したが、戦中は学徒出陣や勤労奉仕のため学生生活は大きな制約を受けることになった。長崎で勤労奉仕していた七高生19名が被爆死したことや、七高は空襲で校舎が焼け、鹿児島市から高尾野（出水市）への疎開を余儀なくされるなど苦難の歴史があったことは、忘れてはならない。（伴野）



教師と卒業生

【教員】

岩崎行親（いわさき ゆきちか 1854-1928）

讃岐国（香川県）丸亀出身。札幌農学校第2期生。1901年鹿児島県立中学校から転じて初代七高造士館館長となる。退官後は私立福山中学校校長に就任し、国家有用の人材の育成を目指した。「国體詩」を作詩。



岩崎 行親
『開校第十周年記念帖』より

永山時英（ながやま ときひで 1867-1935）

鹿児島県市来出身。東京帝国大学史学科を卒業。鹿児島県川内中学校長を経て、1907年から七高造士館教授となる。その後1915年より初代長崎県立長崎図書館長を21年にわたり務める。

武藤長平（むとう ちょうへい 1879-1938）

愛知県津島市出身。東京帝国大学支那文学科を卒業後、1908年より七高造士館教授。のち福岡高等学校教授、広島高等師範学校教授。著書に『西南文運史論』。

ジェームズ・マードック（1856-1921）

スコットランド出身。アバディーン大学で古典文学を学び、学士号を取得。オーストラリアで教鞭をとり、その後政治雑誌の記者となる。1889年、旧制第一高等中学校で英語と西洋史を教える（若き日の夏目漱石も教えを受ける）。1900年鹿児島の七高造士館に着任、1908年契約が満期となるが、鹿児島に留まり、志布志中学校で教える。1917年オーストラリアに戻り、翌年シドニー大学教授。鹿児島時代に刊行を始めた『日本歴史』（全三巻）は1967年まで版を重ねた。

山田 準（やまだ じゅん 1867-1952）

備中松山藩（岡山県高梁市）の木村家に生まれる。16歳で上京し、三島中洲の漢学塾二松学舎に入る。陽明学者山田方谷の孫と結婚し山田家を継ぐ。東京帝国大学文科大学に入学。二松学舎高等科を卒業。師から濟齋の号をもらう。1899年、第五高等学校教授。1901年七高造士館教授。1927年二松学舎学長。

天野貞祐（あまの ていゆう 1884-1980）

神奈川県津久井郡出身。独逸協会中学から第一高等学校、京都帝国大学でドイツ哲学を専攻、卒業後、1914年七高造士館教授。カント哲学の研究を行う。1919年学習院教授、ドイツ留学を経て京都帝国大学へ移籍。1944年退官。戦後、第三次吉田内閣で文部大臣。1964年獨協大学創立、初代総長となる。

児玉幸多（こだま こうた 1909-2007）

長野県更級郡出身。歴史学者。日本近世交通史・農村史。学習院大学名誉教授。東京帝国大学を卒業後、1935年から1939年、学習院大学に移るまで七高造士館で教鞭をとる。著書に『近世交通史の研究』など。日本史の教科書、くずし字解読辞典などを多数編纂。

【卒業生】

岩元 禮（いわもと き 1879-1944）

鹿児島市出身。七高造士館第1回卒業生（1904年7月）。東京帝国大学法科大学卒業。第16代沖縄県知事。第10代鹿児島市長（1933・6-1936・1）。

池田俊彦（いけだ としひこ 1880-1951）

鹿児島県肝属郡大始良村出身。七高造士館第1回卒業生（1904年7月）。東京帝国大学文科大学西洋史学科卒業。鹿児島県立第二鹿児島中学校長、学習院大学教授。著書に『島津斉彬公伝』。

島津久基（しまづ ひさもと 1891-1949）

鹿児島市出身。花岡（現在の垂水市の一部）を領した花岡島津家の9代目。七高造士館第10回

卒業生（1913年7月）。東京帝国大学教授。専攻は日本古典文学。著書に『評釈源氏物語』『羅生門の鬼』『義経伝説と文学』など。

東郷茂徳（とうごう しげのり 1882-1950）

鹿児島県日置郡美山出身。東京帝国大学文科大学独逸文学科を卒業。その後外交官試験に合格。太平洋戦争開戦時から終戦まで外務大臣。戦後、A級戦犯として東京裁判にかけられる。

萬造寺齊（まんぞうじ ひとし 1886-1957）

鹿児島県日置郡串木野町羽島^{はしま}出身。旧制川内中学校から七高造士館に入学。七高造士館第5回卒業生（1908年7月）。東京帝国大学英文科卒。与謝野鉄幹に師事し、森鷗外・北原白秋・高村光太郎らと親交をむすび、雑誌『明星』『スバル』に短歌・小説を發表。雑誌『街道』を主宰。

中江丑吉（なかえ うしきち 1889-1942）

大阪市出身。民権思想家の中江兆民の長男。旧制早稲田中学校から七高造士館に入学。第7回卒業生（1910年7月）。1913年に東京帝国大学法学部政治学科を卒業。中国に渡り、中国政治思想史研究に没頭する。著書に『中国古代政治思想』。

有元史郎（ありもと しろう 1896-1938）

広島県尾道市出身。七高造士館理科卒業。東京帝国大学工学部、経済学部、法学部などを卒業後、30歳で1927年東京高等商工学校（芝浦工業大学の前身）を設立。

花田清輝（はなだ きよてる 1909-1974）

福岡市出身。作家、文芸評論家。七高卒業の後、京都帝国大学へ進学。著書に『復興期の精神』『鳥獣戯話』『アバンギャルド芸術』など。『花田清輝全集』（講談社）。

勝目 清（かつめ きよし 1894-1971）

七高造士館第12回卒業生（1915年7月）。東京帝国大学法学部卒。1921年東京市に勤務。その後、鹿児島市助役を通算13年間務める。1946年6月から1959年4月まで鹿児島市長（第14代）。戦後復興に尽力。著書に『勝目清回顧録』、遺稿集に『鹿児島つれづれ草』がある。

黒田三郎（くろだ さぶろう 1919-1980）

広島県呉市出身。父の故郷である鹿児島市で育つ。第一鹿児島中学校から七高造士館、東京帝国大学経済学部を卒業。詩誌『荒地』同人となり詩や評論を發表。詩集『ひとりの女に』、『詩の作り方』『定本 黒田三郎詩集』など。

赤崎 勇（あかさき いさむ 1929-2021）

鹿児島県川辺郡知覧町出身。1946年鹿児島県立第二鹿児島中学校を卒業後、七高入学。1949年卒業後、京都大学理学部入学。松下電器の研究所を経て名古屋大学工学部教授。半導体研究。2014年青色発光ダイオード研究でノーベル物理学賞受賞。

『七高造士館で学んだ人々』（2000年）によれば、七高の卒業生の累計は、9629名で入学者の86.9%に当たるといふ。卒業生は医学界、実業界、学界など多方面で活躍した。それは前掲書を紐解けば明らかであるが、詳細を紹介することは難しいので、その一面を紹介したい。鹿児島の歴史研究の基礎を築き、その発展に寄与した研究者にも多くの七高出身者がいた。面高正俊（1913-1985、昭和10年卒、鹿児島大学教育学部教授）、芳即正（1915-2012、昭和10年卒、鹿児島純心女子短大教授、尚古集成館長）、原口虎雄（1914-1986、昭和12年卒、鹿児島大学法文学部教授）らは幕末維新期を中心とする鹿児島の歴史の政治、社会、経済を研究、この他、地名研究の平田信芳（1930-2014、昭和24年在籍、卒業は鹿児島大学）、豪商や大島紬など経済史研究の高向嘉昭（1928-2022、昭和25年卒、鹿児島県立短期大学・九州産業大学教授）らがいる。（丹羽）



鹿兒島大学の成り立ち—七高と近代鹿兒島の高等教育機関— 近代鹿兒島の高等教育機関とその立地

鹿兒島大学は、昭和24年（1949）の「国立学校設置法」制定を受けて発足した69の新制国立大学の一つである。開学翌年版の『全国大学一覽』には、初期の学部（文理学部・教育学部・農学部・水産学部・一般教養部）とその所在地が記され、現在と大きく異なる当時の様子が分かる。

学部所在地を見ると、現在と同じ場所にあるのは農学部と水産学部のみで、文理学部と一般教養部は鹿兒島市街地中心部の山下町（当時）、教育学部は鹿兒島郡伊敷村（同）と分散していた。「国立学校設置法」の「同一地域にある官立学校はこれを合併して一大学とし、一府県一大学の実現を図る」とする原則に基づくもので、前身となる官立学校の校地がそれぞれにあったことによる。

鹿兒島大学へつながる近代鹿兒島の高等教育機関を開校順に整理してみる。最初に成立したのは教育学部の前身の鹿兒島師範学校（県立、のち官立）で、学制の発布と義務教育の実施による教員養成を目的とした小学校授業講習所が明治8年（1875）に山下町の県庁構内で発足し、明治13年から鹿兒島師範学校と総称した。次に医学部の源流の一つの医学校（県立）は明治13年に設立され、明治15年に私学校跡の校舎と附属病院（浄土真宗大谷派法主の大谷光勝の寄付）へ移った。しかし、公立医学校運営費の地方税支弁禁止により明治21年に閉鎖されてしまう。

文理学部と一般教養部の前身で、「七高」と呼ばれた第七高等学校造士館（官立）の開校は明治34年（1901）である。前身は鹿兒島県立中学造士館で、同校は築地の鹿兒島中学と磯から旧城本丸へ移転した鹿兒島学校の2校を明治17年に統合して発足した。学校名に旧藩校の名称が付くのは、島津忠義の「造士館再建之願」に基づくもので、七高の発足に際しても次代の島津忠重が運営資金と中学造士館の建物・教材などの寄附と高等学校設置を請願している。なお、大正11年（1922）に七高の敷地が陸軍省から文部省へ移管されており、このことから七高の敷地、すなわち旧鹿兒島城（鶴丸城）本丸と二の丸の一部は廃藩直後から変わらず、国有地であったことが分かる。

農学部の前身の鹿兒島高等農林学校（官立）と水産学部の前身の鹿兒島商船学校（県立、のち官立）の設置・創立は同じ明治41年（1908）である。学校の開設・運営には、通う児童・生徒・学生・教員・職員、集う校地、運営する主体など様々なものが必要であるが、都市の視点から見る時に重要となるのが学校の立地である。この2校は、従来の鹿兒島における高等教育機関と立地が異なり、高等農林学校は明治42年に鹿兒島市荒田村と隣接する鹿兒島郡中郡宇村に跨って開校し、商船水産学校（明治43年改称）も山下町の仮校舎から市街地南端で海に面する景勝地の松見崎へ明治43年に移転した。両者とも七高の位置した当時の鹿兒島市街地中心部ではなく、広い敷地を確保できる郊外に位置していた（右図）。また、師範学校も明治43年に山下町から郊外の武町（移転の前年まで鹿兒島郡西武田村の一部）へ男子部を移転している。これらの点は、鹿兒島市街地中心部の人口増加と住宅などの増加、さらには市街地の拡大とも関連し、学校の立地と校地の変遷を通じて都市空間の変化を読み取ることができる。

二つの「鹿兒島大学」と「統合」問題

時代は下り、昭和10年代後半の戦中期になると、医師と工業技術者の養成が急務となり、昭和18年（1943）に県立鹿兒島医学専門学校（鴨池町）、昭和20年に鹿兒島県立工業専門学校（伊敷村）が相次いで設立された。後者は終戦後、旧陸軍十八部隊の兵舎を校舎に転用し、隣接地には空襲で被災した師範学校も移転している。なお、伊敷村には鹿兒島青年師範学校も置かれていた。

前述の通り、戦後の学制改革による大学開設は、国立大学以外でも行われ、鹿兒島県では県立鹿兒島医科大学（昭和22年設置）と鹿兒島県立工業専門学校を統合して、医学部と工学部からなる県

立「鹿児島大学」が昭和24年（1949）2月に設置された。国立の鹿児島大学が設置されるのは同年5月末のことで、同名の大学が並存する事態は混乱を招くため、前者が同年6月に「鹿児島県立大学」へ名称を変更した。

鹿児島大学の発足当初から分散する校地の統合が課題であり、開学1年半後には農学部を中心とした地域への移転が計画された。予算面から計画推進の困難が予想されたが、統合を加速させたのは皮肉にも昭和27年（1952）4月の長田町大火による一般教養部（旧七高跡、文理学部の教員が担当）の類焼であった。この時、校舎や図書・教材と共に、前年に購入した玉里島津家の蔵書も一部焼失した。

当時の鹿児島市は、戦災復興の市街地整備の最中であり、学部の統合はこれらの都市開発と連動して行われた。現在、郡元キャンパスの西を限り、市電Ⅱ期線が走る市道唐湊通線のルートは、市と大学の協議の結果、当初計画より西側に変更して開通し、確保された統合用地に一般教養部、文理学部（旧女子師範学校跡）が移転した。また、農学部の南にあった鹿児島県農業試験場と鴨池種畜場が鹿児島郡谷山町（当時）と鹿児島市吉野町へ移され、教育学部と附属小学校（武町）・中学校（山下町、附属幼稚園も同じ）が入った。

もう一つの統合として、鹿児島県立大学の国立移管も進められ、昭和30年（1955）に医学部と工学部が鹿児島大学に加わった。工学部は統合用地の一面へ移され、鴨池町（現郡元キャンパス陸上競技場・球技場付近）にあった医学部は附属病院の関係から一般教養部跡へ移転された。工学部前交差点に建つ電柱の「医大前分」のプレートに名残を留める。このように、二つの「統合」を経て、鹿児島大学の初期のかたちが出来上がったのである。（小林）



昭和戦前期の鹿児島市街地と高等教育機関

※「実測番地入鹿児島市街地図」（昭和9年（1934）保野集景堂発行）による。

藩校造士館・七高造士館関係年表

年(西 曆)	事 項	備 考	
安永2年(1773)	島津重豪が、鹿児島城下に孔子廟(聖堂)を設立。	桜島大噴火	
安永3年(1774)	演武館、医学院を設置。		
安永8年(1779)	明時館を設置。		
天明5年(1785)	市来政公・川上嘉膳ら藩政批判をなし、処罰される(古学崩れ)。		
天明6年(1786)	藩校の名を造士館と定める。		
文化5年(1808)	文化朋党事件(秩父崩れ、近思録崩れ)起こる。山本正誼辞職。		
安政4年(1857)	10月、島津斉彬が造士館・演武館の改革の通達を出す。書籍商設置。		
明治4年(1871)	廃藩置県。藩校の流れをくむ本学校、郷校を廃止。		
明治14年(1881)	公立鹿児島学校設立。翌年、鹿児島城本丸跡に移転。		
明治17年(1884)	県立鹿児島中学校を吸収して県立鹿児島中学造士館設立。		日露戦争
明治20年(1887)	鹿児島高等中学造士館設立。(明治29年廃止)		
明治29年(1896)	鹿児島尋常中学造士館設立。		
明治34年(1901)	3月、文部省直轄諸学校官制改正、第七高等学校造士館設置。 4月、岩崎行親が校長心得となる。 9月、初の入学試験を行い、合格者147名を発表する。 10月25日、開校式を挙る。		
明治36年(1903)	5月、岩崎行親、校長兼教授に任ぜらる。		
明治37年(1904)	4月、学友会雑誌創刊。7月、第1回卒業生(87名)		
明治39年(1906)	1月、熊本の五校との対抗戦が始まる。7月、岩崎校長ら教員4名、校医1名、生徒53名が満韓地方に修学旅行に行く。		
明治40年(1907)	10月27日、皇太子(後の大正天皇)行啓。		
明治44年(1911)	10月、開校十周年記念式を挙る。		
明治45年/大正元年(1912)	2月、西寮竣工。 10月、桃山御陵参拝の修学旅行実施。	7月30日改元	
大正3年(1914)	4月、東寮竣工。	桜島大爆発	
大正7年(1918)	11月、悪性感冒(スペイン風邪)流行につき、臨時休業。	第一次世界大戦	
大正9年(1920)	1月、南寮竣工。3月26日、皇太子(後の昭和天皇)行啓。		
大正10年(1921)	10月、学年開始を本年より10月に変更、実施。		
大正11年(1922)	5月、化学実験室一棟、博物実験室一棟増築成る。 11月、学校敷地、陸軍省より文部省所管となる。		
大正12年(1923)	5月19日、久邇宮邦彦王行啓。		
大正14年(1925)	3月、運動場敷地(1200坪余)を購入。 4月、陸軍現役将校が配属され、教練が始まる。		
大正15年(1926)	10月、開校25周年記念『記念誌』を刊行。		
昭和2年(1927)	2月、西寮・南寮焼亡。		
昭和10年(1935)	11月17日、昭和天皇行幸。		
昭和11年(1936)	3月、『行幸記念誌』刊行。7月、本館を磯(鹿児島市吉野町)に移築。		
昭和12年(1937)	5月、新本館落成。	12月25日改元	
昭和15年(1940)	学友会を報国会に名称変更。		
昭和18年(1943)	9月、文科系学徒の徴集延期停止(学徒出陣)。		
昭和19年(1944)	4月、全寮制となる。		
昭和20年(1945)	6月17日、鹿児島大空襲により校舎全焼。 8月9日、長崎に原子爆弾が投下され、七高生19名が死亡。 11月、出水(高尾野)の海軍航空隊兵舎敷地に移転。		
昭和21年(1946)	3月、「第七高等学校」と改称変更を命じられる。		
昭和24年(1949)	5月、鹿児島大学発足。「鹿児島大学第七高等学校」となる。		
昭和25年(1950)	最後の第47回卒業生が卒業。3月31日、廃校。		
			8月15日敗戦



〔行發堂文閣田池〕 No.7 Higher School, Kagoshima. 三其松植手御内庭校學等七第 (所名島兒鹿)

絵葉書「第七高等学校庭内御手植松」



會動運上陸念紀年周十校開館士造校學等七第

絵葉書「開校十周年紀念陸上運動會」

主要参考文献

『秋水先生文集』写本、鹿児島県立図書館蔵

『造士館演武館志』写本、鹿児島県立図書館蔵

『島津国史』島津家編輯所、1905年

『第七高等学校造士館開校第十周年記念帖』第七高等学校造士館、1911年

家村助太郎『造士館二教授傳』鹿児島県立図書館蔵、1923年

永吉實弘編『記念誌』第七高等学校記念祝賀會、1926年

『第七高等学校造士館一覽』第七高等学校造士館、1889年～1943年

鹿児島県『鹿児島県史 第二巻』鹿児島県、1943年

鹿児島県『鹿児島県史 第三巻』鹿児島県、1943年

文部省大学学術局大学課編『全国大学一覽 昭和25年度』、1951年

『鹿児島大学十年史』鹿児島大学、1960年

『七高思出集 前篇』第七高等学校造士館同窓会、1960年

『七高思出集 後篇』同上、1963年

作道好男・江藤武人編『北辰斜にさすところ 第七高等学校造士館50年史』財界評論新社、1970年

黒田安雄「薩摩藩文化朋党事件とその歴史的背景」『九州文化史研究所紀要』第19号、1974年

寛田知義『旧制高等学校教育の成立』ミネルヴァ書房、1975年

鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 旧記雜録追録6』鹿児島県、1976年

『わが青春一七高時代』北辰会、1979年

芳即正『島津重豪』吉川弘文館、1980年

芳即正『島津斉彬』吉川弘文館、1993年

「文化朋党実録」『鹿児島県史料 島津齊宣・齊興公史料』鹿児島県、1985年

『第七高等学校造士館開校九十五年記念誌』第七高等学校造士館同窓会本部、1995年

『鹿児島県史料集(41) 薩藩学事二・薩藩学事三』鹿児島県立図書館、2002年

『七高造士館で学んだ人々(名簿編)』七高史研究会、2000年

『第七高等学校造士館開校百年記念誌』第七高等学校造士館同窓会本部、2000年

丹羽謙治「藩校と近代の高等教育機関」(鹿児島大学法文学部編『大学的鹿児島ガイドーこだわりの歩き方』)、2018年

木崎弘美「第七高等学校「造士館」号の研究」『大倉山論集』第66輯、2020年3月

本冊子の編集時には、鹿児島県歴史・美術センター黎明館、鹿児島市立美術館、鶴嶺神社、名古屋市蓬左文庫、温泉ホテル中原別荘、多田蔵人氏のご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。(編者)



中原別荘屋上より鹿児島中央公園を望む
(2023年7月2日撮影)

令和5年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開

藩校造士館創立 250周年記念 藩校造士館と第七高等学校造士館

編者

丹羽謙治（法文学系教授）

執筆者

佐藤宏之（教育学系准教授）

大淵貴之（教育学系准教授）

小林善仁（法文学系准教授）

鈴木優作（法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター特任助教）

伴野文亮（法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター特任准教授）

企画

鹿児島大学附属図書館

鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

発行

鹿児島大学附属図書館

<https://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/>

〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-35

☎099-285-7460

発行日

令和5年12月1日

印刷

斯文堂株式会社